読書は心の糧。子ども読書のつどい開かれる

第 708 号
発行人●豊丘村公民館
館長 原 国人
編集人●長野県下伊那郡
豊丘村公民館報
編集委員会
0265－35－9066
印刷所●龍共印刷株式会社

私たちの村
（2月1日現在 ※外国人を含む）

男	3，335人
女	3，372人
総人口	6，707人
世帯数	2，182戸

ネット社会が進む中、若者の読書離れが進み、子どもたちの国語力が課題と言われています。一方で豊丘村においては、平成八年、当時の教育委員長・毛涯章平先生の提唱で始まった「誕生日図書の贈呈」は、子どもたちが心豊かに育ってほしいとの願いをもって今日まで続いており、全国に特筆すべき事業となっています。

読書習慣が学力を決めるとさえ言われる昨今、あらためて、読書の意味を問い直し、読書の村づくりをすすめる一助にしたいとの願いから、一月二十六日、ゆめあるてを会場に「子ども読書のつどい」が開かれ、保護者をはじめとして、七十余名の皆さんが参加されました。

■学力テストの課題

この催しの発端となったのは、昨年の三月村議会において学力テストの結果について質問があり、当時の昼神教育長から「読解力に課題があると思われる」との答弁があったことからでした。

そこで、公民館と図書館では読書教育に関心を持つ方々と一緒にプロジェクトを立ち上げ、様々な角度から議論を深めてきました。

その議論の中で、二十三年前から続く誕生日図書の評価と検証を行うことになり、昨年の十月に、児童生徒とその保護者、そして保育士・教職員を対象にしたアンケート調査を行いました。その結果を踏まえて、この日の催しが計画されたのです。

つどいの冒頭、壬生英文教育長は、「誕生日図書が始まって四半世紀が経とうとしている今、村の将来を担う子どもたちの健全育成を願って、誕生日のお祝いに村から本を贈って『人材育成百年の計としたい』という、事業発足の『初心』に返り、これからの取組みについて考え合うことにしたい」と、催しの主旨を訴えました。

続いて、昨年六月の南小学校音楽会において五年生が発表し感動を呼んだ、新美南吉の児童文学「ごんぎつね」の映像が流れたあと、中学生二人によるスピーチがありました。二年生の三澤萌衣さんは毛涯章平著『白い虫・黒い虫』を取り上げ、「本をたくさん読むと心に白い虫が育つと教わり、それ以来、本を読むようになりました」と語り、三年の池野琴葉さんは年間百五十冊を読むと言い、「作者は亡くなっても私はいつでも作品の世界に入ることができる。私にとっての読書は、人生体験であり、時間旅行であり、冒険なのです」と語りました。

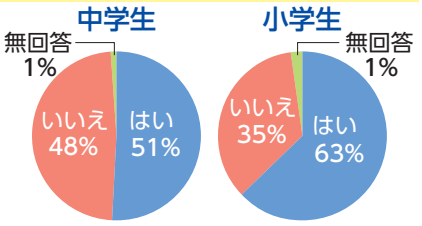
■誕生日図書アンケートから

次に、教育委員の昼神賢児さんから、誕生日図書の調査結果について報告がありました。

アンケート調査には小二から中三までの五二三人（回収率九十五％）が回答し、保護者からは三三五人（回収率七十七％）の回答がありました。

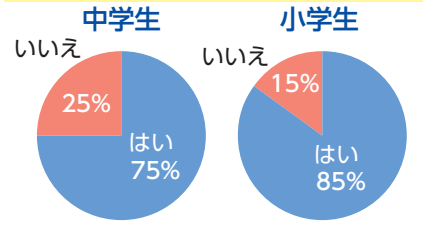
小中学生に、「誕生日図書を最後まで読みましたか？」との問いに、小学生では六十三％、中学生では五十一％が最後まで読んだと回答（**図①**）。

①本を最後まで読みましたか？



「本の内容が期待したとおりでしたか？」との問いには、小学生は八十五％、中学生は七十五％が良かったと回答（**図②**）しています。

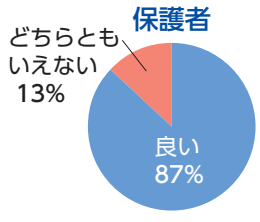
②本は期待どうりでしたか？



この他、誕生日図書の贈呈によって本が好きになった子どもが多いことも分かってきています。

一方、誕生日図書に関する保護者の評価では、全体で八十七％の親（小学生の親九十％、中学生の親八十一％）が「良い」と、豊丘独自の取組みを評価（**図③**）し、継続を望む意見が多数寄せられています。また、本を貰えるのが当たり前になってしまい、今回の調査で、あらためてこの事業の意義を再認識された保護者が多かったものと考えられます。

③誕生日図書の評価は？



しかし、改善の要望として、本の選書の見直しを図ってほしいとの意見が保護者の十％余、中学生にも十四％あり、児童生徒が読みたい本と、専門家が読んでほしい本とのギャップがあることも分かりました。選書に当たっての今後の検討課題になると思われます。

調査結果から総括的に言えることとして、誕生日図書を続けてきたことによって、子どもの成長を自覚したり、村の全ての人に見守られていることを感じたり、周りの町村から羨ましがられていることを誇りに思うなど、この取り組みが児童生徒を含め、回答者から高く評価されていると言えます。

また、保護者の中には、自分が誕生日図書をもらった経験があり、その本が自分を育ててくれた原風景の一つのように思われたり、別の保護者からは、「いつの日か、子どもたちの心の糧となり花を咲かせてくれると思う」と、将来に期待を持つ声もあります。このことからも、「本の贈り物」は、豊丘で育つ子どもたちにふるさとを愛する心情や生きる力を育み、人生をより味わい深い豊かなものにしてくれる意義ある取り組みである、との教育委員会の見解が示されました。

■越高一夫氏の講演から

最後に、これまで誕生日図書の選書に深く関わってこられた越高一夫先生（松本市にある「ちいさいおうち書店」代表）が『誕生日図書は村の宝もの～心をつなぐ読み聞かせとブックトーク～』と題して講演しました。

二千年をピークに子どもの読書量が年々減っていることに憂慮を示して、岩波書店の新聞広告『読むことから始めよう』（朝日新聞元旦号）の一節を引用し、「本をゆっくりと味わいながら読む▼多くのことを知る▼想像する▼考える▼誰かと対話する▼対話で得た本をまた読む。この繰り返しの中で他者と共有できる論理、他者を理解する創造力が生まれる」と、読書の意味について参加者に語りかけました。

また、いくつかの誕生日図書を紹介しながら、「本は、その字面を追うだけでなく、生活の中で言葉のもつ楽しさを感じることができる媒体としてある。子どもが読まなかったら、大人が読んであげることが大切。絵本から読み物に移っていくときに、それまでの大人の関わりが少ないと、耳から聞いたり、文字を読んで、頭の中に映像を描くことができにくく、読み物をすらすら読めるようにならない。映像文化が氾濫している今の時代、読書教育にとって一番の課題だと思う」と提起されました。

締めくくりには入試改革に触れ、「本を読むだけでは成績は良くならないと考える人もいるが、これからの時代を生きるには「読解力」が試されることになる」と、読書の必要性を力説されました。

（子ども読書のつどい実行委員・公民館長　原国人）

段丘

東京オリンピック開催まであと数ヶ月になりました。開会式の服装も紅白のデザインに決まり、出場選手も決まってきて、どんな活躍がみられるんだろう、メダルはいくつとれるんだろう？　活躍を伝える演出はどんな感じかな？　オリンピック関連でブレイクするものは何だろう？　待ちにまったオリンピックイヤーはあっという間に過ぎてしまうのかなあ？

新型のウイルスが流行したり、異常気象が続いたりしている今日この頃ですが、野菜や果物は、豊作だといいなあ。今年は松茸いっぱい採れるかな？　話題がつきない年になりそうです。

その年の世相をあらわすものに「今年の漢字」がありますが、今年はどんな字が選ばえるんだろう。ぜひとも夢のあるような明るい漢字が選ばれるといいなと思っているのは私だけでしょうか。

「今年の豊丘の漢字」は期待を込めて「松」がいいな。

（原　明美）

新成人意見発表

成人の決意

豊丘団地　内山綾人

私達も二十歳となり、これまで沢山の事があった様に思います。この先皆それぞれの道を歩んでいくことと思いますが、この豊丘村で育んだ優しさや温かさを忘れず、これまであったひとつひとつを大切に立派な社会の一員になりたいと思います。

私には幼い頃から電車の運転士になるという夢がありましたが、私は人前で話す事も、周りの人達と協力する事も苦手で、とても鉄道人になれるような人ではありませんでした。「夢は夢で必ず叶えられるものではない」と諦めていた私ですが両親が言ってくれた「いつか綾人の運転する電車に乗れたら嬉しいね」という言葉を聞いて、これが自分だけの夢ではない事に気付きました。そしてこの言葉をきっかけに私は本気でこの夢を追いかける事にしました。中学では協調性や協力する力を身につけるため保健・給食委員会をやりました。周りの人達や先生方と話しながら協力して物事を実行する、この経験をへて「自分一人で全てが出来るわけではない」という所から協力の大切さを学んできました。高校では商業科に進学し人との話し方やわかりやすい説明の仕方を勉強しました。「人に伝えるためには人の事を考えなければならない」。当時の先生から教わった言葉です。今でもこの言葉は私が接客の時に一番大切にしているものです。苦手を克服し、自分なりに精一杯努力をして、いま私はＪＲ東海の名古屋駅で駅員として働いています。幼い頃に思い描いた夢をかなえられるように更に努力していきたいと思います。最後になりましたが、本日成人式を迎えられたのは、支えてくださった両親や先生、地域の方々そして今ここにいる仲間のおかげです。この感謝を忘れずにこの先の人生を歩んでいこうと思います。

空に向かって大きく高く

八王子　福沢実結

私達も成人を迎え、大人としての責任と自覚をより多く持たなければならない立場となりました。この場にいる一人ひとりが違う場所でその役割が果たせるよう、日々努力を積み重ねていきたいと思います。

私達は、この緑豊かな豊丘村に生まれて義務教育から高校や大学への進学、就職などそれぞれ自分の道を進んできました。そして、その過程にはどこにも欠かさず家族や友人、地域の方々の支えがありました。これからはその恩は返していけるよう、豊丘村というふるさとで仲間と共に成人を迎えた誇りを胸に刻み、社会に貢献できる存在になりたいと思います。

私は高校卒業後、地元の短期大学へ入学し、看護師になるための勉強をしています。看護師は人の命に寄り添い、小児から高齢者まで幅広い年代を対象とする職業です。大学へ入学してからは、今までとは違う専門分野の勉強に、自分には本当に向いているのか悩んだことも沢山あります。ですが実習の最終日､受け持たせていただいた患者さんから「空に向かって大きく高く」という言葉と共に青空の中浮かぶ風船の描かれた絵葉書をもらってから、私が看護師になることを待ってくれている人がいると感じることができました。この経験を通して、私は看護師という職業の大変さを知ると共に、一人ひとりとまっすぐに向き合うことのできる職業であると改めて感じました。

二十歳を迎えたこれからの一年は、人生において一つ目の大きな分岐点になると思います。ですが私たちにはまだまだ先の長い、可能性が広がる未来が待っています。その日々を過ごす中で出会う人も数えきれないほどであると感じます。看護師を目指す私にとっても、この場にいる全員にとっても、何にも代えられない財産である人との出会いやつながりを大切に、看護師という立場でこの地域に貢献していけたらと考えています。

最後に、今日私たちがここに集い、笑顔で成人式を迎えることが出来るのは、私たちを支えてくれた家族や共に歩んだ友人、教え導いてくださった先生方、私たちの成長を温かく見守って下さった地域の方々のおかげです。この感謝の気持ちと、豊丘村で生まれ育った誇り、そして成人としての決意を心に刻み、日々精進していきたいと思います。

自然の中で育った経験

上村　福沢心

今日、私達は成人式を迎え、晴れて大人への仲間入りを果たしました。社会の一員として自分の言動に責任を持ち、また一人の大人として自立できるよう邁進して参ります。とはいえ、私はまだ学生だからか、あまり実感が湧いていないのが正直なところです。春からは私も社会人になるので、今以上に気を引き締めて今後は生活していきたいと思います。

成人式を迎えるにあたって、二十年間私を育て、そして支えてくれた両親に改めて感謝したいと思います。また、小、中、高と尊敬する素晴らしい恩師や、切磋琢磨し合える仲間と出会い、私は本当に恵まれた学生生活を送れたと強く感じています。今の自分があるのは、この豊丘村で過ごした学生時代が有意義なものであったからだと思います。

私は幼い頃、母と一緒に豊丘村を散歩して、道に咲く花や昆虫を観察していました。また、私は絵を描くことが好きだったので、散歩の途中で足を止め花のスケッチもしていました。そのような経験から自然に関わる仕事がしたいと考え、私は現在、専門学校で造園技能士二級、室内園芸装飾技能士二級の国家資格を取得し、この春からは三重県の建築会社で庭の設計師として働く予定です。今はまだ学生として学業に励む日々ですが、残り三か月でより多くの知識を吸収し、一日でも早く会社に貢献できる人間になりたいです。また、この自然豊かな豊丘村で育った経験を糧に、そこで生活する人と共に生きていくような庭の設計、提案ができるように精進してまいります。そして、庭を通して自然の良さを様々な人に知ってもらいたいです。

社会人になるにあたり、最近は政治や経済など不安定で、それに対する不安もありますが、少しでも社会の一員として貢献できるよう努めてまいりたいと思います。

私は、生まれ育ったこの豊丘村が大好きです。今後はリニアの建設などでこの村も発展していくと思いますが、ここで培った自然を想う気持ちを忘れず、新生活でも頑張っていきます。最後になりましたが、このような素晴らしい式典を開いて下さった地域の皆様、ここまで私を支えてくれた家族や先生方に感謝を申し上げます。

シリーズ「元気な高齢者」64

幾多の苦労を乗り越え掴んだ幸福健康

壬生文男さん　九十一歳

小園在住

昭和三年に伴野原の大柏で、六人きょうだい（男四、女二人）の四男として生まれた。田畑、養蚕を主体とする農家で小規模ながらも世間並みの暮らしであった。しかし小学校入学前に突然母親が亡くなるという不幸に見舞われ、文男さんが母親代わりとなり四歳下の妹の面倒を見た。出兵していた長男は死に目に会えなかったことを、後々まで残念がった。また次男は六歳の時、不治の病で亡くなった。

高等科二年を卒業し、松尾の編み物屋に二年間勤めた後、田村の洋裁店に移り、反物を扱った。当時まだ戦局は厳しかったので十八歳の時、志願兵として海軍の横須賀に入団したが、半年ほどで終戦となった。その直前に肋膜炎を患い入院中のことであった。この肋膜炎で後々まで文男さんは苦しむこととなった。

終戦により帰郷、洋裁店に復帰し、ミシン操作を習得し数年間在籍、技能を磨いた後、小園で洋裁店を開業した。そんな頃の三十一歳の時、姉の嫁ぎ先の紹介により六歳下で飯田市の文子さんと結婚し、それを機に現在地へ引っ越した。しかし時代の流れは早く、完成品の販売が主流となってきたため反物に見切りを付け、五年程できっぱり辞めた。文子さんは結婚後暫くして喬木の土産物店で働き、以後三十四年の長きに亘って勤め家計を大いに助けた。文男さんは金銭的に執着しない面があり、サイフの紐は文子さんが握っていた。

何かと苦しめられていた肋膜炎は、義父の勧めでマムシの粉を煎じて飲んだことで完全に治ったことは、大変な喜びであった。その後、電子部品製造会社に入社し定年前まで勤めた後、屋敷を買い増し新築した家に戻り土木関係の仕事に就いたが負傷してしまったので、暫く自宅療養後、シルバー人材に登録。自宅近くの廃材プラスチック処理会社に配属となり、仕事から完全に退く八十二歳まで十数年間勤めた。その間に松の木の剪定、ふすま貼りなどの技能を習得、その成果を近隣の人達に施し喜ばれた。

夫婦共通の楽しみは旅行で、北海道から九州更に中国、香港など国の内外各地を旅して見聞を深めた。

文男さんは数年前に三年間患ったパーキンソン病が、今では医者も驚くほど回復している。これ以外には入院歴がなく、聴力、脚力、視力とも問題なく、百歳まで生きると意気軒昂である。カラオケを好み、近くの施設を中心に三十年ほど仲間と楽しんでいる。他にゲートボールを週に二日程行っており、自宅でゆっくりくつろぐ時間がないほどだ。地域への貢献では、お宮の仕事、学校のＰＴＡ役員、消防団員などを勤めた。

現在は長男夫婦との四人暮らしで､五年前にリフォームした自宅で快適且つ元気に過ごしている。ただ八十五歳で運転免許証を返納したため行動範囲が狭まったことは不自由に感じている。元来の綺麗好きにより庭の草取りをこまめに行うなど､家回りは年中整頓されている。しかし細かい仕事を好んでやる一方で、テレビのチャンネル操作は奥さん頼りとのこと、この対極が実に面白かった。

若い頃、職を転々とし奥さんに苦労かけたことを、今さらながら申し訳なく思う一方で、愚痴を言わずに支えてくれたことを感謝している。

文責　桐崎　長一

豊丘の郷土資料を集めています

豊丘村図書館･資料館では、豊丘村、神稲村、河野村、豊丘の偉人について書かれた（記録された）古い資料を寄贈してくださる方を探しています。

例）**神稲人物誌**
　　河野村誌略、など

お心当たりのある方は豊丘村図書館・資料館までご一報ください。

電話　35−2286（図書館）
　　35−9066（資料館）

虻川下流域三六災害体験談⑨

豊丘南小学校の記録に残る三六災　その1

聞き手　原　章（古畑）

今回から三回にわたって林里側の豊丘南小の三六災の事を書きます。

☆昭和五十二年豊丘南小学校百年誌委員会発行の「豊丘南小学校の百年」にも三六災のことが載っています☆

・三六災害のため臨時休校（梅雨前線豪雨、六・二十八～七・五）

・虻川が土砂でうまり校庭を水が流れる。

・理科室の地下薬品庫は、水がつき使用不能となる。

などの記述があります。

☆当時の学校職員の方たちが書いた日誌には、もっと詳しく生々しく記録が残されています☆

六月二十七日（火）豪雨

大雨の為午后授業打切り　児童引率帰宅させる

被害甚大　洪水

六月二十八日（水）雨時々曇

大洪水　道路　家屋被害多く　旧公民学校危険につき理科室　音楽室の備品を搬出す　水害のため　臨時休校

六月二十九日（木）雨

伴野の避難家屋の家財、午後になって雑庫に二軒分入れる　水害のため臨時休業　伴野河原、小園河原を天竜川の本流が流れる

六月三十日（金）曇時々雨

水害にて臨時休業　虻川橋水防　自衛隊通過

県知事来村　電気くる

七月一日（土）曇時々雨

水害のため臨時休業　俄雨のため公民学校横等の水防（運動場に流水の恐れあり）自衛防自動車十台駐車（后五　三十）虻川の水やや落ち着く

（続く）

36災経過後の昭和39年当時の南小と虻川

こちら資料館 ㉑

中芝の秋葉講

村内で秋葉講が今も続いている地域が幾つかあると聞いていますが、私はその実態を把握していません。

その中の一つ「中芝秋葉講」について江戸時代からの文書が「先達（せんだつ）」に引き継がれてきた木箱に残っていることが分かり、この度、横須賀市の学芸員の方に調べていただきました。

その結果、一番古い文書は享和（きょうわ）二年（一八〇二）のもの（写真）で、その頃すでに中芝地域に秋葉講が存在していたことが確認できました。

その他の江戸期の文書は数点しかありませんでしたが、明治以後の「奉納帳」「代参人名簿」「秋葉講連名帳」等が数多く残っており、江戸期以来の講の活動状況がほぼ分かります。特に今回、代参人として秋葉山に詣でた人名が、明治四年から現在に至るまで一年も途切れることなく残っていることが判明しました。ただ、残念ながらこの講の取り決め等に関する文書は一切見つかりませんでした。

昨年の十二月末に行われた中芝秋葉講納会の集まりには、お二人の学芸員の方も参加され「二〇〇年以上続く貴重なこの講を絶やさないよう続けていただきたい」とお話しされました。

（資料館主任　唐澤武彦）

寄稿

素晴らしい出会い

南市場　日下部富次

先日パルムで買い物カートを押して歩いていた。するとどこかでみたことのある母娘が私に挨拶してくれた。しかも二人とも満面笑顔なので「どなたでしたかね？」と聞き返した。すると「先日娘が、この辺りでおじさんの押しているカートと突き当たって、お詫びしたらしい」。ああそうだった。確かにそういうことがあった。あれは私の方がうっかりしていてお詫びすべきだったのに、この娘（小学校五年とのこと）が先に詫びてくれたのだった。それで私も詫びて次のように誉めたのだった。

「あなたは何年生？　こんな気持ちの良い謝り方ができるのは、あなたのご両親が素晴らしいんだね」というような褒め言葉だったと思う。買い物を終えてレジに行くと再び会った。母親は「娘はおじさんに誉められて嬉しくて直ぐ私達に報告してくれたの」とお礼を言ってくださり、父親と弟もにこにこして頭を下げてくださったのだ。

現代は挨拶さえなかなかできないのに、この素晴らしい親子と出会って感動してしまった。この娘はこの素晴らしいご両親の背を見て育った。「躾のため」と言って暴力を振るうような事件が報じられる最近、やっぱり「親の背を見て子は育つ」のだとつくづく感じ入った次第です。この出会いによって教育の原点を改めて教えられた気がしました。

とよおか100年前 ㊻

『豊丘村民話集』より

亀山稲荷大明神縁起（三）

柿外土　丸山鑑一

（前号からのつづき）

さて、次に後日談。

時は移り大正十二年ころか。考古学が大変盛んになった。故原芳文先生が神稲尋常高等小学校に奉職の頃、これも郷土のこの道の大先達・故市村咸人先生（当時、飯田高等女学校に在職）を案内されて甕の調査に来られた。

縄文ではもちろんない、弥生でもない。須恵器（高温で焼いた土器）とすればこの文様がいまだに未発見だ。朝鮮土器とでもいうのか。朝鮮からとすれば、これだけの大きさ（高さ約六十㎝、肩回り百八十㎝、底は鈍く尖り巾着型。『豊丘村史』上巻五十七頁、第四〇図参照）のものを、どうして運んできたか、などと話しておられるのを、十五歳の頃の私は側で、じっと聞いていたものだ。

さて再び時は移り昭和二十年、日本はかつて味わったことのない敗戦の憂き目にあい、神聖天皇は人間天皇となり、神秘に閉ざされていた原始太古の時代に学問のメスを入れて究明すべく、わが村でも考古学が隆盛を極めてきた。昭和二十三年、村内・大矢沢で須恵器古窯趾が確認され、次いで二十六年に学術調査された。少なくとも千二百年以上を経たこの遺跡は調査団により詳細に発掘調査が行われ、遺物は北小学校で大切に保管されているという。

大甕を祀る祠（ほこら）

そして須恵器として大矢沢で作られたこの大甕はほぼ完全な形を保つものとして郡下唯一のものという。亀山稲荷大明神のご神体も、学問の前に百数十年を経て、ついにベールを脱いだわけである。ちなみに我が家の開運守護神として祀ってあったればこそ、この貴重な土器が完形を保ちえたものと思われる。

祀ってより満百年、今後とも永久に丸山家の開運守護神として我が家を見守り続けて下さることでしょう。

（豊丘村民話集・第壱輯（だいいっしゅう）〈昭和五十二年〉より）

文責　壬生雅穂

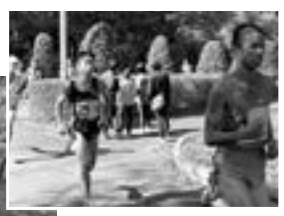
駅伝部として活動して

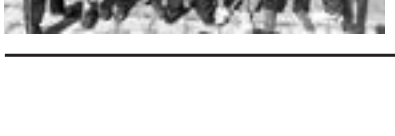
豊丘中学校駅伝部　酒井源太

駅伝部に三年間所属し、仲間と力を高め合いながら、三年目にして念願の北信越大会出場を果たすことができました。僕たちは一年生の時からずっと北信越大会という舞台をめざしていて、三年生になった今年は特にその気持が強かったように思います。しかし、二年生の時に出場した県中駅伝大会では、今年と同じメンバーで臨んだにも関わらず、三十九位という結果で、まだまだ力の差があることを痛感させられました。あれから一年がたち、それぞれが自主練習を重ねながら力を伸ばしてきました。

県中駅伝当日はとても緊張しましたが、どこかわくわくする気持ちもあり、最高のコンディションで六人がレースに向かいました。スタートから五区までの順位は二十四位でした。最後のアンカーの仲間に先生方や応援団とエールをおくり、四人抜きを実現させ、何とかぎりぎりの二十位で北信越の切符をつかむことができました。三年間、活動を続けてきて仲間の大切さを改めて知ることができました。元々仲の良いチームでしたが、北信越大会出場に向けての練習が学校でできない日も近くの堤防に集まり、自分達で考えたメニューに取り組んだり、励まし合ったりしてきた結果が北信越大会出場という成果として残せたことが嬉しいです。仲間と一緒に目標に向かって努力するのは楽しく、とても価値あることだと知り、これから別々の進路へ向かっていくけれど、この経験を忘れず、何事にも挑戦していきたいと思います。

最後になりましたが、一年生から練習を指導して下さった酒井さん、大会に引率して下さった先生方、激励して下さった村長さんはじめ村民のみなさま、本当にありがとうございました。駅伝部として活動ができ、本当に良かったです。





冬の分館行事

第一分館 囲碁ボール大会

筒井隆彦

第一分館（河野）では恒例の冬季レクリエーション大会を二月二日（日）に北小学校体育館で開催しました。ここ数年は小さなお子さんからお年寄りまで、どなたでも参加できる競技として囲碁ボール大会を開催しています。

今回は二十四チームの参加、六コートで実施しました。近隣町村からも用具を借用し大勢の方が囲碁ボールに触れていただくことが出来ました。単純なルールですが実際に競技を行うと、思ったところへボールが配置できたり、そうでなかったりと、笑い声に囲まれ和気あいあいと、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。今年は暖かい冬となっていますが、とかく体を動かすことの少ない冬に体を動かすこと、そして地域の方々と親睦を深めることができ、有意義であったと感じます。この様な行事を通じ、地域内でのしなやかな連携が深まることこそが地域の宝であると感じています。

第五分館 ボウリング大会

平　克久

二月九日に第五分館でボウリング大会が行われました。今回は、他行事も重なり前回よりも少ない全員で三十三名の参加者でした。それでも、それぞれで一球一球に一喜一憂しながら、和気あいあいとプレーすることができました。私自身、ボウリングはあまりしませんが、地域の人達と一緒に楽しむことができました。

現在、分館役員をやらせてもらってます。それまでは分館の行事には、ほとんど参加をしていませんでした。実際に携わってみると様々な行事があり、それまでなかった地域の人と関わりもできました。分館役員に携わってからは、年代関係なく関わる場を作っていくのは大切なことだと実感しております。私自身、人と話すことは苦手ですが、こういった行事に参加したりして場馴れしていけたらと思います。また、行事の内容もどの人も参加しやすいように今後も考えていければと思います。

ボウリング大会の結果はあまりよくありませんでしたが、有意義な時間になったと思います。これからも参加できる時は積極的に参加していこうと思います。

〜シリーズ〜 No.193 豊丘の自然

ナナツホシテントウ（テントウムシ科）

ここ何回か繰り返し書いている「対策、対応」なる言葉、どうも新聞の一面（関連記事は他面にもある）に集中しているようで、ある意味、納得できた。

ところで、今回、紹介するナナホシテントウはアブラムシを捕食する益虫。よく似ているオオニジュウヤホシテントウはナス、ジャガイモの葉を食べる害虫。経験か、科学的かは別にして、益虫と害虫に分けた。

さて、人間にとって都合の悪いオオニジュウヤホシテントウに対する、それこそ、「対策、対応」は何なんでしょうか。農薬の開発か手でつぶすかだが、「自然との共生」を主張すればする程、解決が遠のくような気がしてならない。

（山田　拓）

歌は世につれ〜 四話

惜別「なごり雪」

上佐原　小池　光好

長年の東京暮らしに別れを告げ、故郷豊丘村に帰ることとなった早春、職場で送別会を開いてくれ、二次会でカラオケに行った。そのとき若い女性が「なごり雪」を歌った。私との別れを意識して選曲した訳では決してないと思うが、感慨深く聴き入った。いよいよ仲間とも東京とも別れて去っていくんだという実感に包まれ、あれやこれやが走馬灯のように駆け巡った。

私は大都会東京ならではの物事（観戦・観劇・鑑賞・歓楽等）を享受・満喫することはほとんどなかったが、東京にはまったく未練がなかった。なぜなら、私は自然と触れ合う方が性に合っていたからだ。東京の地の利を活かして、北海道・東北・上越・信州などで登山やスキーを楽しんだ。さらに、四十二歳で実家を建て替えてからは、金帰月来、毎週のように帰省していて里心が宿り、帰郷への想いが募っていった。

「なごり雪」はフォークグループ〈かぐや姫〉の伊勢正三が作詞作曲した、後世に引き継がれる名曲である。かぐや姫のアルバムの中の一曲であったが、フォークシンガーのイルカがカバーし、大ヒットした。

♪汽車を待つ君の横で僕は時計を気にしてる　季節はずれの雪が降ってる　東京で見る雪はこれが最後ねと　さみしそうに君がつぶやく♪　本来は、大学を卒業して遠い故郷に帰ってしまう君（彼女）との二度と会うことのない別れを歌った、せつなさ漂う歌であるが、様々な場面で様々な別れの曲としても受け取れ、今なお卒業ソングの定番として幅広い世代に歌われていると聞く。

別れは出会いの始まりとも言う。私は帰郷後、地区の人達に温かく迎え入れていただいている。また、公民館活動を通じた出会いにも恵まれた。感謝の一言である。

【原稿募集】
歌にまつわる思い出やエピソードなどを、写真を添えてお寄せください。字数は問いません。投稿お待ちしております。

俳句短歌

久久の追羽子の突く音拾う　磯部セツ子
うから皆去り蛸梅の香に佇てり　田中　静
健康を第一に掲ぐ初日記　片桐　洋子
初茜亡き母仰ぎ深息す　森田　恵子
木枯を猫と見ているガラス越し　三島　保子
竿になり駒嶺めざす初御空　三島　里子
福だるま気ばりて入れる黒目玉　木下　眞水
ざざ虫の研究室も伊那にあり　松岡　照子
白駒の凍湖の鳥や鳴き響む　宮下　公
赤き実の映ゆる枯庭手紙の木　宮下　純子
令和への土間に居座る茎の石　池田　美和
寒戻る金星ひとつ明け残る　丸山　時子
寒風の荒ぶ天竜川汽笛めく　林　恵美子
母逝きし歳となりけり冬銀河　矢島千勢子
信濃の国閏こゆる冬夕焼　河手　洋子
葉牡丹の渦清冽や亡夫の忌寿　北原　昭子

〈とよおか短歌会〉

小さき手で玉葱きればぽろぽろと涙ふきつつグラタンづくり　筒井　恵子
すり初めの長芋する音リズミカル味つけ役も帰郷の息子　福澤貴美恵
横浜の娘は脳トレの本買いて老いたる我に来る度くるる　壬生　千春
「白鯨」とう挿絵も渋き連載小説の佳境に入りて朝刊を待つ　大倉　知江
歯固めの市田柿贈りその礼にみかん頂きインフル防ぐ　松下　泰見
今年こそ吉野の桜見に行こう曾孫とかわす卒寿の指切り　毛涯百合子
田舎にも若き一家のぽつぽつと灯もれて明るい予感　大原眞由美
美しき四季写したるカレンダー連絡文書を貼られ隠れる　北澤　秀子
早春の天竜川は瀬をかえて岸辺の木には伐採印あり　松尾ヒサコ
ゆずり葉は若葉を待ちて潔く落ち葉となりぬ緑濃きまま　福澤　亀人

川柳

〈豊丘村川柳クラブ豊柳会〉

▼課題「根」　久保ひろし　選
大木も根こそぎ豪雨容赦なく　桃沢　健介
辛抱と根性母の背が教え　西元　峯子
軸吟…貧しさが根性我慢強くする

▼課題「定」　互　選
定年のない農業で今日も生き　林　もも子
農業は定年なくて自由意志　安田　喜子
定例会いつもの顔に安堵する　久保ひろし

▼自由吟　桃沢健介　選
除夜過ぎてゴーンゴーンと騒がしい　山本　義彦
裏腹に年の始まりきな臭い　原　美風
柿出荷終えて安堵のお正月　福沢　勝美
軸吟…雪の無い正月春が案じられ